

令和2年度 Sport in Life 推進プロジェクト
(スポーツ実施を阻害する課題解決のための実証実験)
「インクルーシヴ・スポーツ学童」

事業報告書

令和3年2月

一般社団法人飛騨シューレ

令和2年度 Sport in Life 推進プロジェクト
(スポーツ実施を阻害する課題解決のための実証実験)
「インクルーシヴ・スポーツ学童、」
事業報告書

目次

本事業の目的	1
1 本事業の実施概要	2
(1) 本事業のターゲット	2
(2) ターゲットのスポーツ実施の阻害要因、促進要因（事業実施前の仮説）	2
(3) 本事業で期待される効果	4
2. 本事業の実施内容	5
(1) 事業の実施概要	5
(2) 事業の実施結果	6
3. 本事業の実施体制	11
(1) 本事業の実施体制	11
(2) 本事業の実施スキーム	11
4. 事業の実施効果（スポーツ実施頻度、実施意欲の改善効果）	12
(1) 効果検証方法	12
(2) 効果検証の結果	14
5. スポーツ実施改善の要因の分析（阻害要因や促進要因の仮説検証）	21
6. 今後の事業展開予定	23
(1) 事業継続や横展開に向けたポイント、課題	23
(2) 次年度以降の事業継続、横展開の計画	23
(3) 今後の事業展開に向けて期待される sport in Life プロジェクトにおける取組	24
7. 終わりに	25

本事業の目的

本事業は、スポーツ参画人口の拡大に向けて、Sport in Life コンソーシアム加盟団体が連携・協働して実施する取組を後押しするとともに、先進事例を形成することにより、全国各地にスポーツ参画人口の拡大に向けた取組を展開するためのモデルを創出することを目的に実施したものである。

【目的】

- ① 1人でも多くの子供が「スポーツは楽しい」「スポーツ大好き」と認識し、スポーツをする時間が増えること。そのためには、子供たちのスポーツに対するある種のコンプレックスを取り除くことや、指導者のコーチング能力の高さに拠るところが大きい。また、スポーツを楽しみと思わない、「スポーツ嫌い」の子供たちの共通点、「面倒くさい」「疲れた」「無理」がスポーツに付き物で「自分にはできない」と思い込んでいることを払拭することである。
- ② 週1回のスポーツ活動の習慣化。放課後学童活動にスポーツを取り込む、という手法をとることで、子供たちの生活の流れの一環としてスポーツが存在することになる。
- ③ 保護者・指導者の意識改革
スポーツのイメージが「勝利至上主義」「厳しい指導は当たり前」「スポーツはお金がかかる、手がかかる」という固定概念を持つ大人たちを変えていくことが、子供とスポーツとの関係を良好にする。指導者のひとりよがりな指導方法や「自分が勝ちたい」という自己中心的な考えに固執するあまり、子供に対する人権意識が薄れ子供の心身を傷つけることが往々にしてあるが、それが指導者の資質にマイナスに働くという「気づき」を持たせることが、意識改革の第一歩になる。

1 本事業の実施概要

(1) 本事業のターゲット

本事業におけるターゲットは以下の通り。

【ターゲット】

- ① 飛騨市立神岡小学校 1年生～4年生
21人＋神岡町内の保育園年長4人＝25人（チラシで募集）
- ② 神岡町内の保育園児～小学生の保護者全般
- ③ 飛騨地域の子供対象のスポーツ指導者

(2) ターゲットのスポーツ実施の阻害要因、促進要因（事業実施前の仮説）

○ターゲットの「スポーツ実施を妨げている要因」

スポーツ実施を妨げている要因については以下の通りと認識している。

【阻害要因】

① 子供の要因

- ・子供の遊び形態（遊びの主体がゲーム）が変化し、子供がスポーツ離れの傾向にある。
- ・家庭環境の変化（家族の就業率が高まる、ひとり親の増加）や過疎による地域の広範囲化により近隣に体育施設がない（公共交通機関もない）ことに伴い、こども自身がスポーツ参加を希望しても、送迎や用具購入にかかる経済的理由でスポーツ参加がかなわない場合がある。

② 保護者・指導者の要因

- ・「勝利至上主義」や「厳しい指導が伴うこと」がスポーツに対するイメージであること。
- ・子供を変えるには、子供を取り巻く大人の意識改革が必要。
- ・子供が「スポーツは楽しい！」「スポーツ大好き！」という気持ちになるには、指導者の資質向上が重要かつ不可欠であること。

○ターゲットの背景や現状（本事業の対象者）

事業開始前に「子供とスポーツとのかかわりについて」アンケートを行った。詳細は以下の通り。

ターゲット	神岡小学校（1～6年生）の保護者（回答率97%）
期間	2020年7月3日～8日
調査方法	アンケート調査
主な質問項目	<ul style="list-style-type: none">・お子さんは週1回以上、運動・スポーツをしていますか？・週何回程度、運動・スポーツをしていますか？・1回に行う運動・スポーツの時間はどれくらいですか？・放課後児童クラブ（学童）の存在をご存知ですか？

	・今後、スポーツに特化した放課後児童クラブ（学童）があれば、利用したいと思いますか？
--	--

上記「事前保護者アンケート」の結果、「週1回以上スポーツを実施している」割合は53%であり、「週1回以上スポーツをしていない」児童は47%となった。「週1回以上スポーツをしていない」児童のうち、52%が、「今回の事業が実現すれば、参加したい」という意向を示した。とくに、1年生（64%）と3年生（63%）は「利用したい」意向が強いと見受けられた。

○課題解決の方向性

上記アンケートから、スポーツしたい意向はあるものの、コンスタントに実施できていない子供が一定数いることが分かった。

これを受けて、課題解決の方向性として下記を検討した。

【課題解決の方策】

・下校時スクールバスによる直接帰宅のため、スポーツをしようと思うとわざわざスポーツ施設へ足を運ばなくてはならない。スポーツをする施設への公共交通手段がない（自家用車のみ）。

→送迎の必要性

・家族の就業率が高く、放課後児童クラブ（学童保育）の受け入れ枠がない状況。また、そのクラブでは、テレビをみたりおやつをたべたりと体を動かさない子供たちが多い。
→「インクルーシブ・スポーツ学童」の導入を通じて学童の受け入れ枠を拡大する。また、スポーツに特化させたプログラムとし、**楽しく体を動かす環境を提供する。**

・スポーツに費用をかける余裕がない。（学習塾や習い事に費用をかける割合が多い）

→用具のサポートや学習の時間の確保、スポーツ以外の活動の充実が重要

今回のターゲットである神岡小学校では、インクルーシブ・スポーツ学童事業をきっかけとしてスポーツに参加しやすい環境を整えば、「週1回以上運動をしていない」と回答した児童のうち、「学童保育があれば参加したい」と答えた61名をスポーツ実施に促すことが見込める（対全校生徒比率で約25%）。また、保育園児（年長）を取り込むことで、小学校進学後も継続活動することが見込まれ、スポーツ実施率が上がる可能性が大きい。

(3) 本事業で期待される効果

本事業を通じて得られる効果については、以下のように考えている。

【期待される効果】

- ・インクルーシヴ・スポーツ学童事業が、今回の実証実験をきっかけに継続的に実施され子供たちがよりスポーツに参加しやすい環境を整えれば、全校児童のうち週1回スポーツ活動をしている子供132人が193人に増え、全校比率でいくと約8割の子供が週1回以上スポーツを実施する可能性がある。
- ・保育園児（年長）を取り込むことで、小学校進学後も継続活動することが図れ、スポーツ実施率が上がる可能性が大きい。
- ・過疎地域の子供の数が減少していく中、なかなか大勢で遊ぶことが出来ない彼らにとって、インクルーシヴ・スポーツ学童は、みんなでスポーツを楽しむ場であり、また、縦割りのなかでの子供のコミュニケーション能力を育むことが期待される。

2. 本事業の実施内容

(1) 事業の実施概要

本事業では主に、子供を対象としたインクルーシヴ・スポーツ学童を実施するとともに、子供のスポーツ実施を支える保護者、指導者向けのワークショップを実施した。

① 子供向けのプログラム：インクルーシヴ・スポーツ学童

子供のスポーツ参加を阻害していると思われる、送迎や用具提供、補食、学習支援等のサポートを提供しつつ、楽しく運動に触れられる機会を提供した。

(具体的な活動)

- ・下校後、スポーツ施設への送迎
- ・お菓子等の補食、学習支援
- ・スポーツ活動（用具提供）

② 保護者向けのワークショップ：ペアレンティングワークショップ

保護者はじめ子供を取り巻く大人の意識改革を促すためのワークショップを実施した。

③ 指導者向けのワークショップ：グッドコーチングワークショップ

指導者のコーチングにおける引き出しを増やすため、指導者の学びの機会を提供するためのワークショップを実施した。

(2) 事業の実施結果

本事業の実施結果は以下の通り。

①子供向けのプログラム：インクルーシヴ・スポーツ学童

○日時：9月中旬～1月末までの毎週火曜日

・9月29、10月6、13、20、27、11月10、17、24、12月1、8、15、22、
1月12、19、26、計15回

・下校時～18：00

○場所：飛騨市神岡町桜ヶ丘体育館（飛騨市神岡町桜ヶ丘）体育室全面および会議室1室

○対象：小学1年生～小学4年生、チラシに「クラブチームやスポーツ少年団などのメンバーではなく、習慣的なスポーツ活動をしていないお子さん」という募集条件を記載。保育園児（年長）に関しては希望者が参加した。

○募集人員：小学生1年生～4年生、保育園年長児を対象にチラシを配布し募集したところ、25人（年長4人、1年4人、2年7人、3年4人、4年6人）が申込んだ。募集条件を満たし、誓約事項を承認した保護者の子供を参加者として登録した（25名）。

○安全管理

・子供たちの安全確保はもとより、緊急時の連絡、測定・調査の便宜のため登録制にした。

登録には、緊急連絡先、保護者名、アレルギー既存症など、参加するこどもの健康状態を把握する問診を併記した登録用紙を準備。

・各種目指導者は、毎回子供の観察状況を記録。

・飛騨市桜ヶ丘体育館近隣の医療機関との連携により救護体制をとる。

・指導者や運営スタッフには個人の保険を、活動自体にはイベント保険をかける。

・新型コロナウイルス感染防止対策の徹底（検温、消毒、手洗い・うがいなど）

○プログラム内容

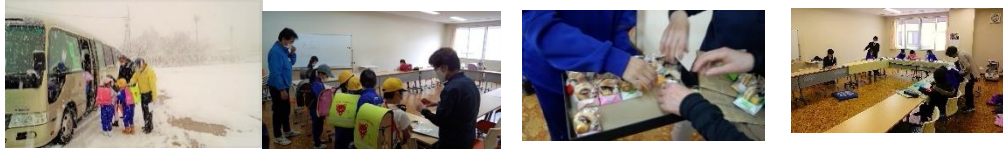
小学生

・下校時から直接スポーツ活動場所へ移動（バス送迎…安全確保）

・学習室（会議室）にて学習の時間（宿題や自由勉強、希望者には個人指導）

・補食（主としてクッキーやおせんべいを折紙で折った箱や紙コップに入れて提供）

・体育室にてスポーツ活動の時間（自由遊びはじめ、テニス、スナッグゴルフ、バドミントン、ユニホッケー、バスケットボールなど日ごろ体験できないスポーツを提供



保育園児（年長）


15：30 をめどに保護者が活動場所の体育館まで送る。（1年生2年生と合流）
 学習室（会議室）で折り紙やお絵かき、絵本読みなどし、そのあと体育室で小学生と
 合流。



②保護者向けのワークショップ：ペアレンティングワークショップ

- ・11月19日「望ましい人の一生～たくましく育て、健やかに老いる」（50人参加）
 講師：宮下充正氏（東京大学名誉教授・首都医校校長）


図表 1

名称	ペアレンティングワークショップ宮下充正氏
開催日時	2020年11月19日
開催場所	神岡公民館
アジェンダ	<p>(1) 開会 (2) 【講義1】～ 講師：宮下充正</p>  <p>テーマ：「望ましい人の一生～たくましく育て、健やかに老いる」 次世代を担う子供たちのために、大人がどうしたらよいか、大人たちは自身のからだをどうすべきか、健やかに長寿を全うするには、子供のころからの運動（スポーツ）の習慣化がいかに重要か、科学的なデータを交えながら、わかりやすく解説。講師自ら実験台として集めるデータや日々の生活ぶりも紹介。</p>
参加者概要	<p>地元出身の県会議員 1人 飛騨市最大企業社長 1人 神岡町商工会議所 3人 神岡町内シニア体操クラブメンバー（子供たちのボランティアサポーター） 20人</p>

	飛騨市立小中学校教員 2 人 保健士（飛騨市保健センター） 3 人 保育士 3 人 日本スポーツ協会認定コーチ 2 人 飛騨市教育委員会課長 1 人、職員 4 人 一般 3 人
--	---

- ・ 11 月 21 日 ペアレンティング・ファミリーウォーキングセッション「宮下先生とノルディックウォークしよう！」（40 人参加）

図表 2

名称	ペアレンティング ファミリー・ウォーキング・セッション
開催日時	2020 年 11 月 21 日
開催場所	神岡町内 かみおかまちなかコース 
アジェンダ	(1) 開会 (2) 【講義 1】～ 講師：宮下充正氏 「週一の身体活動機会づくり」のきっかけとして「ウォーキングセッション」を行い、ボールを使ったノルディックウォーキングを体験。カモシカに出会った藤波八丁～がおろの道～坂巻公園～江馬館～神岡城～かみおかのすてきなスポットを巡る。地元再発見とともに、清々しい空気を吸いながらのウォーキングがいかに気持ちよいか、を感じる機会になった。
参加者概要	教育委員会スポーツ振興課長 1 人、学校教育課長 1 人、職員 3 人 飛騨シューレシニア会員 20 人、キッズ会員 10 人

③指導者向けのワークショップ：グッドコーチングワークショップ

・12月15日（20人参加）

・12月17日（12人参加）

講師：佐藤晃一氏（JBA トレーナー）



内容；決して無理強いしない、からだと心のケアや誤った身体の使い方を避けることの重要性の共有を図ることを目的としたワークショップを行った。

図表 3

名称	子供のボディケアとスポーツパフォーマンス
開催日時	2020年12月16日、17日
開催場所	神岡町公民館 3階会議室
アジェンダ	<p>(1) 開会</p> <p>(2) 【講義1】～ 講師：佐藤晃一氏</p> <p>「目からうろこが落ちる」</p> <p>こどもたちが積極的にスポーツ活動に参加できるような、その後スポーツを生涯享受できるように、さらに、大人たちの意識向上のための話。からだの使い方間違いの指摘や心理的な指導法などについてレクチャー。</p>
参加者概要	<p>16日 飛騨地区の高校の部活指導者、教職員 20人</p> <p>17日 飛騨市内のスポーツ少年団指導者 12人</p>

④その他（「からだ遊び」ワークショップ）

・12月3日「からだ遊び」ワークショップ（子供対象）

（45人参加）

講師：萩原美樹子氏（女子バスケットボール元日本代表）



図表 4

名称	ボールで遊ぼう！
開催日時	2020年12月3日
開催場所	桜ヶ丘体育館
アジェンダ	<p>(1) 開会</p> <p>(2) 【講義1】～ 講師：萩原美樹子氏</p> <p>スポーツが苦手な子供たちに、ボールを使った楽しい遊びを紹介。だれでもできるボール投げを導入部に、徐々に何度を上げていく。できなくても「大丈夫」という安心感を持たせる手法。地元高校のバスケットボール部員9人を、子供たちのアシストに活用し、子供たちがお姉さんお兄さんと遊ぶ感覚で実施。ゴールポストもセスとボール用</p>

	<p>の低いリングを使用。ボールも柔らかい素材のものを利用した。スポーツは楽しい！もっとやりたい！という気持ちを起こさせる工夫がいっぱいあった。</p>
<p>参加者概要</p>	<p>44 人の子どもたちと 9 人の高校生たちが一緒に活動。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子供：インクルーシヴ・スポーツ学童の 1 部 16 人 飛驒シューレキッズクラブ 28 人 ・ 高校生：地元の岐阜県立飛驒神岡高校バスケットボール部部員 9 人

3. 本事業の実施体制

(1) 本事業の実施体制

本事業の実施体制は下記の通り。

図表 5

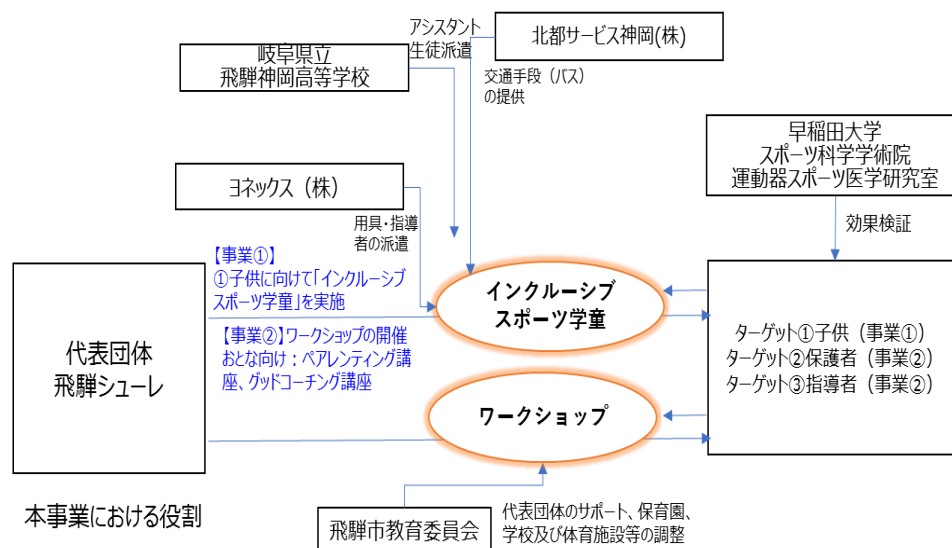
実証フィールド	岐阜県飛騨市神岡町の子供たち 神岡町内の保育園年長～神岡小学校1年生～4年生
代表団体	一般社団法人飛騨シューレ*
構成団体	飛騨市教育委員会、早稲田大学スポーツ科学学術院運動器スポーツ医学研究室、岐阜県立飛騨神岡高等学校、ヨネックス株式会社、北都サービス神岡株式会社、
構成団体以外の参画団体	なし

※ 「*」は Sport in Life コンソーシアム加盟団体

(2) 本事業の実施スキーム

本事業における代表団体、構成団体、その他参画団体の役割は下記の通り

図表 6



4. 事業の実施効果（スポーツ実施頻度、実施意欲の改善効果）

（1）効果検証方法

各ターゲットの効果検証方法については、以下の通り。

図表 7

ターゲット	① 子供
調査方法	<p>【身体活動量調査】腰部分に身体活動量測定機器を事業前後 5 日間つけて活動量を調査し比較。座位時間の減少がみられるか、活動量の増加がみられるか計測。</p> <p>【QOL 調査アンケート】子供の運動の不得意感の改善や運動の定着がみられるか保護者の観察や保護者の子供への質問で回答。</p>
期待される効果	<ul style="list-style-type: none"> ・身体活動量調査 →座位の時間の短縮 →身体活動量の増減 ・QOL 調査アンケート →運動に取り組むハードルが下がる。(運動嫌いや運動不得意感が改善)
主体	早稲田大学

図表 8

ターゲット	② 保護者
調査方法	<p>【事前アンケート】事業参加者応募前に、ターゲットとなる小学生が通う小学校全校保護者に対し、子供の週一以上のスポーツ実施率、スポーツ学童への興味等のアンケート調査を実施。</p> <p>【ヒアリング】参加登録者 25 人の子供たちの保護者に直接電話し、子供の帰宅後の様子や保護者からの要望・感想を聞く。</p>
期待される効果	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者の、子供のからだ遊びに対する理解の深化。 ・保護者の理解の深まりに伴い、積極的に子供のからだ遊びを支援するようになり、子供のスポーツ活動の継続性が向上する。
主体	<p>事前アンケート（飛騨市教育委員会）</p> <p>ヒアリング（飛騨シューレ）</p>

図表 9

ターゲット	③ 指導者
調査方法	毎回の活動後、指導者ひとりひとりにリフレクションレポートを記述してもらい、子供のスポーツ実施率や継続性を向上させる工夫について検討をする。

期待される効果	「スポーツは楽しい」「スポーツ大好き」と子供たちが思うようなグッドコーチング（アプローチ）の習得。
主体	飛騨シューレ

(2) 効果検証の結果

① 子供への効果について

1 QOL 調査アンケート

QOL 調査アンケートにおいて、運動の好き嫌いについてアンケート調査を実施した。

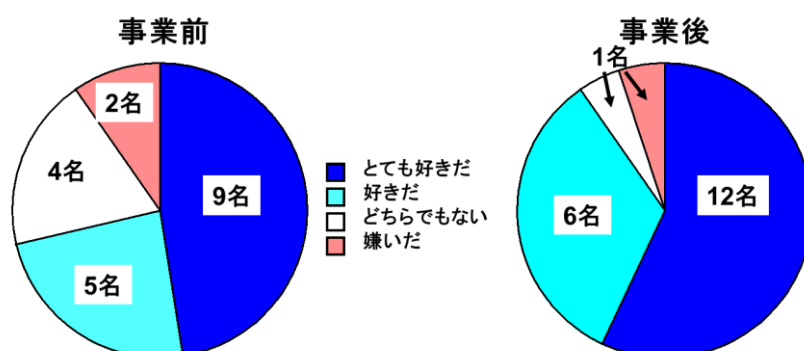
図表 10 QOL 調査アンケート

ターゲット	インクルーシヴ・スポーツ学童参加登録者 24 人(当初 25 人だったが、1 人長期病欠のため除外した。)、うち有効な回答を得られたのは 20 人
目的	事業前後での子供のスポーツに対する好き・嫌いの変化の把握。
期間	事業直前 2020 年 9 月 24 日～28 日、事業直後 2021 年 1 月 27 日～31 日
調査方法	子供の運動の不得意感の改善や運動の定着がみられるか、保護者が子供を観察あるいは子供に直接質問して回答。
調査項目	運動の好き嫌いについて、1 (とても好きだ)、2 (好きだ)、3 (どちらでもない)、4 (あまり好きでない)、5 (嫌いだ) の 5 段階で聴取した。

図表 11 において、インクルーシヴ・スポーツ学童参加登録者について、事業開始直前と事業終了直後、同じ設問の QOL 調査を行い、比較している。1 (とても好きだ) 2 (好きだ) の人数が 4 名増加しており、3 (どちらでもない)、4 (あまり好きではない)、5 (嫌いだ) は 4 名減少している。

上記より、スポーツを嫌いになる児童はほぼおらず、スポーツを好きになる傾向が見られた。言い換えれば、運動体験を増やすことで運動が好きになり、これによりスポーツに取り組みたい意向がポジティブな方向に変化することが示唆された。

図表 11 QOL 調査(事前、事後)



2 身体活動量調査（その1）

図表 12 の通り、事業開始直前に身体活動量測定（以下、「身体活動量測定（その1）」という）を行った。

図表 12 「身体活動量調査（その1）」の概要

ターゲット	① 参加群 インクルーシヴ・スポーツ学童参加登録者 25 人 ② 非参加群 インクルーシヴ・スポーツ学童非登録者（一般児童）18 人
期間	「インクルーシヴ・スポーツ学童」事業開始直前の 5 日間（2020 年 9 月 24 日～28 日）
目的	「インクルーシヴ・スポーツ学童」事業参加直前の日常の活動量を計測する。（座位時間 SB が算出される）
調査方法	腰部分に身体活動量測定機器を装着。今事業のターゲットとなりうる子供たちの身体活動傾向（座位時間が算出できる）を事前調査。
調査項目	PA（身体活動量）、SB（座りがちな行動）、LPA（軽強度の身体活動）、MVPA（中強度から高強度の身体活動）、VPA（高強度の身体活動） ※ 運動のイメージ LPA：散歩 MVPA：ドッジボール、遊具で遊ぶ VPA：ランニング

「身体活動量調査（その1）」の結果は、図表 13 にまとめている通り「未就学児（神岡）・小学生（神岡）」のデータである。また、先行研究である東京・京都の小学生の活動量を「小学生（先行研究）」として、同じく図表 13 に記載。本事業前の「未就学児（神岡）・小学生（神岡）」のデータによると、先行研究である都市部に住む小学生と比べ、山間部である神岡の子供たちは、全ての活動量の割合が低く、座りがちな行動の時間の割合が高かった。

図表 13 「身体活動量調査（その1）」の結果と
先行研究（Chiaki Tanaka, 2017）の比較

	未就学児（神岡）		小学生（神岡）		小学生（東京・京都）		
	時間(分)	割合(%)	時間(分)	割合(%)	時間(分)	割合(%)	
装着時間	832.9		868.6		802		
SB	325.5	39	459.2	52.5	363	45.2	
LPA	歩行	112.5	13.5	92.6	10.7	105	13.1
	非歩行	302.3	36.3	261.4	30.1	225	28.1
	トータル	414.9	49.9	354	41.1	360	44.9
MVPA	歩行	41.9	5	26.7	3.1	39	4.9
	非歩行	44.1	5.3	24.9	2.9	28	3.5
	トータル	86.1	10.3	51.6	6	68	8.5
VPA	歩行	4.7	0.6	2.8	0.3	5	0.6
	非歩行	1.8	0.2	1.1	0.1	1	0.1
	トータル	6.5	0.8	3.9	0.5	6	0.7

（略称の説明）
PA：身体活動
SB：座りがちな行動
LPA：軽強度の身体活動
MVPA：中強度から高強度の身体活動
VPA：高強度の身体活動

3 身体活動量調査（その2）

事業日程終了直後に、事業開始直前と同様「身体活動量調査」を行った（事業終了直後の「身体活動量調査」を以下「身体活動量調査（その2）」とする）。「身体活動量調査（その1）」と「身体活動量調査（その2）」を比較し、事業前後での、座位時間の減少や活動量の増加がみられるかを検証した。事業に参加する子供だけでなく、神岡地域の未就学児・飛騨市立神岡小学校児童（一部）の傾向把握を目指した。

また、同じデータから、「インクルーシヴ・スポーツ学童参加登録者」と「非登録者（一般児童）」に分け、前者を「参加群」、後者を「非参加群」として分析を行った。

図表 14 「身体量活動調査（その2）」の概要

ターゲット	① 参加群 インクルーシヴ・スポーツ学童参加登録者 24 人(当初 25 人だったが、1 人長期病欠のため除外した。) ② 非参加群 インクルーシヴ・スポーツ学童非登録者（一般児童） 18 人
目的	・「身体活動量調査（その1）」と「同（その2）」を比較し、活動量等の変化を計測する。 ・「参加群」と「非参加群」を比較し、「インクルーシヴ・スポーツ学童」に参加することによる効果を計測する。
期間	事業直前 2020 年 9 月 24 日～28 日、事業直後 2021 年 1 月 27 日～31 日
調査方法	腰部分に身体活動量測定機器を装着。事業前後を比較。座位時間(SB)の減少がみられるか、活動量の増加(PA)がみられるか計測。 ※「身体量活動調査（その1）」と同内容
調査項目	・SB、LPA、MVPA、VPA の値の変化(図表 15) ・PA※1（身体活動量）と SB（座りがちな行動）(図表 16, 17) ※1 PA は、LPA（軽強度の身体行動）、MVPA（中強度から高強度の身体活動）、VPA（高強度の身体活動）の和 ※2 「身体量活動調査（その1）」と同内容

まず、「インクルーシヴ・スポーツ学童」の参加群・非参加群の区別なく、神岡地域の未就学児～小学6年生の「身体活動量調査（その1）」と「同（その2）」を比較したものが図表 15 である。参加群と非参加群の比較の前に、神岡地域の未就学児及び神岡小学校児童（一部）の1年生～6年生の活動量の傾向を計測することを目的とした。「身体活動量調査（その1）」の結果が事業直前（pre）であり、「身体活動量調査（その2）」の結果が事業直後（post）である。

結果として、図表 15 に見られるように、SB（座りがちな行動）が増加して活動量減少の傾向がみられる結果となった。この理由は、冬季・積雪のあるシーズンの測定となったこと

から、思うように運動に取り組みず、活動量が下がったことが理由として考えられる。

図表 15 活動量調査（その1）と同（その2）の各年代比較

（神岡地域の未就学児・神岡小学校）

※参加群・非参加群の別は考慮せず

	未就学児		1年		2年		3年		4年		5年		6年	
	その1	その2	その1	その2	その1	その2	その1	その2	その1	その2	その1	その2	その1	その2
装着時間(分/日)	832.9	843.8	853	864.0	862.9	859.1	861.3	856.5	819.8	865.3	953	959.2	861.6	895.1
SB(分/日)	325.5	339.0	373.3	386.5	384.4	436.7	460.7	449.3	395.3	433.8	590.6	622.2	550.6	569.7
SB/装着時間(%)	39	40.2	43.7	44.8	44.4	50.7	53.6	52.2	48	50.2	61.7	64.9	63.4	62.7
LPA(分/日)	414.9	416.3	396.1	399.0	408.2	367.4	349.8	363.0	370.6	377.2	316.4	302.1	282.6	297.4
LPA/装着時間(%)	49.9	49.4	46.5	46.1	47.5	42.9	40.5	42.6	45.3	43.5	33.4	31.5	33.2	34.0
MVPA(分/日)	86.1	84.6	76.4	73.0	65.2	51.6	47.6	42.6	49.6	51.1	43.2	33.9	27.3	27.3
MVPA/装着時間(%)	10.3	10.0	9	8.5	7.5	6.0	5.5	5.0	6.1	5.9	4.6	3.5	3.2	3.2
VPA(分/日)	6.5	4.0	7.2	5.5	5	3.4	3.1	1.5	4.3	3.2	2.9	1.0	1	0.7
VPA/装着時間(%)	0.8	0.5	0.8	0.6	0.6	0.4	0.4	0.2	0.5	0.4	0.3	0.1	0.1	0.1

※黄色マーカーが（その1）と（その2）を比較して増加した項目、黄緑マーカーが同比較において減少した項目

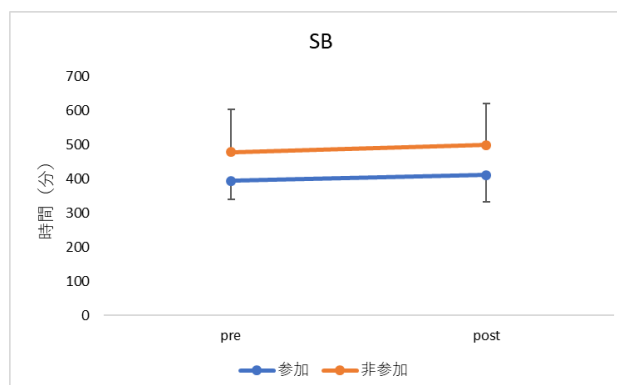
また、図表 16～17に見られるように、参加群と非参加群について、事業前後で比較したところ、SB（座りがちな行動）は参加群・非参加群ともに増加した一方、PA(身体活動の強度にかかわらず、身体活動全般)は参加群・非参加群ともに減少する結果となった。

当初、「インクルーシヴ・スポーツ学童」に参加することにより、SBが減少し、PAが増加する効果を予想していたものの、積雪の影響等もあり当初想定していた効果を測定することはできなかった。

図表 16 SB 値の変化

（pre:身体活動量調査（その1）と post:同（その2）の比較）

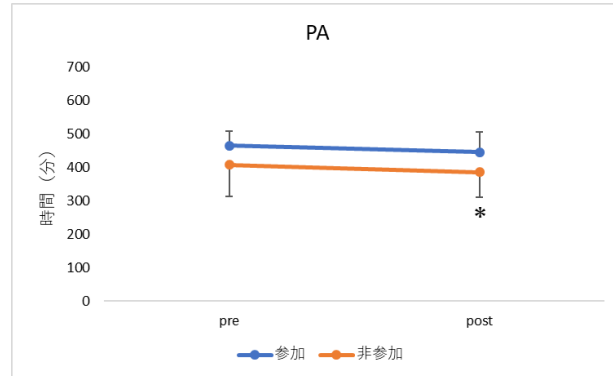
SB	pre	post
参加	394.140625	410.881944
非参加	478.818514	499.795759



図表 17 PA 値の変化

(pre:身体活動量調査(その1)と post:同(その2)の比較)

PA	pre	post
参加	465.165923	444.902158
非参加	407.318948	385.05878



4 調査のまとめと子供の活動の観察から得られた示唆

「身体活動量調査(その2)」と「QOL調査アンケート」の結果をまとめると、以下の通りである。季節等の影響もあってうまく成果が出なかった部分があるが、条件を整えば、「インクルーシブ・スポーツ学童」によるスポーツ機会の提供を通じて、子供のスポーツ実施率を向上・持続させる可能性があることを確認できた。

(QOL調査アンケートについて)

- ・アンケート回答により、スポーツ学童保育を継続することで、子供たちが運動の楽しさを実感する傾向が見られた。
- ・継続的に運動の楽しさを理解することによって、スポーツ実施のハードルが下がり、子供たちのスポーツ実施率の向上に寄与できるのではないかと考えている。

(身体活動量調査(その2)について)

- ・積雪のため屋外での身体活動が減少する時期であったこともあり、身体活動量調査(その1)と比較して、大幅な身体活動量の増加が見られなかった。
- ・季節の変化に伴う外部環境を整えば、身体活動量の減少を食い止めることに加えて、増加が見込めるのではないかと考えられる。

また、子供たちの様子を客観的に観察し、明らかになった点は以下の通り。身体活動量からは見られない部分ではあるが、「子供の態度」や「他者への理解」といった側面も重要な効果として指摘をしておきたい。

【子供たちの様子の変化】

- ・スポーツ学童の「楽しさ」により、登校拒否の子供が学校へ通えるようになった。
- ・上級生が、下級生や保育園児の面倒をみたり、25人の中で意見を言い合ったり注意しあったりといったコミュニティ形成がみられた。

- ・ コミュニティ意識が向上し、掃除や片付けが自主的に行われるようになった。
- ・ インクルーシヴのため、障がいのある子供への理解が深まった。
- ・ 回数を重ねるに従い、子供たち自身で「できるスポーツ」を見出した（参加者の概ねは、事業参加前、スポーツが苦手で、好きではなかったため）。

① 保護者への効果について

- ・ 子供を参加させたい意向が強まったと判断されるコメントが 25 人中 20 人みられた。これは、「スポーツに対するイメージが変わった」保護者が増えたことに起因していると考えられる。（15 人が変わったと回答）
- ・ 「用具」「送迎」「学習支援」のサポートが参加のハードルを下げたというコメントが 10 件寄せられたことから、スポーツ実施の周辺的なサポートがスポーツ参加を促進する大きな要因であると認識した。

図表 18 主なアンケート回答

- ・ 子供が帰宅後にする話を聞いて、「スポーツは楽しい」ものだ、ということがわかった。
- ・ できるだけ子供にからだを動かせたいがなかなか機会を作れないので、今回の事業は助かった。
- ・ 飛騨では経験できない種目があったよかったです。
- ・ 学習（宿題ができる）の時間が良かった。
- ・ スポーツに対するイメージが変わった。
- ・ 参加させたい意向が、事業前より高まった。
- ・ 送迎・用具・学習のサポートが参加ハードルを下げた。

② 指導者への効果について

- ・ 「勝利至上主義」ではなく「子供が楽しいと思える」指導法を実践することが、子供のスポーツ参加率を高めるうえで重要であると指導者間で認識された。
- ・ 継続的に講習会を実施し、指導方法のメンテナンスを行うことも客観性をもって指導をする上では重要であることが参加者のコメントより分析できる。

図表 19 主なアンケート回答

- ・ 講師の話で「目からうろこが落ちる」思い。
- ・ ひとりよがりの指導法を反省。
- ・ 常に学ばなくては、と思った。定期的なワークショップを期待したい。
- ・ 子供たちが楽しくスポーツ活動を行えるよう、今までの指導法を見直したい。
- ・ 勝利至上主義からの脱却ができた。

- ・ 継続的なワークショップの参加を望む。

5. スポーツ実施改善の要因の分析（阻害要因や促進要因の仮説検証）

4. における調査結果を踏まえ、ターゲットごとにスポーツ実施率を改善する要因を分析すると以下の通りであると考えられる。子供についてはスポーツの楽しさを体験することを通じて身体活動量が増加すること、また楽しさを理解することを通じて継続性が見込まれることが重要である。また、保護者については、スポーツを実施させるハードルをさげるため意識面や環境面でのサポートが必要なこと、指導者については勝利至上主義に偏らない子供が楽しさを見出せるような指導方法を取り入れる重要性が確認された。

図表 20 スポーツ実施改善の要因

子供	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「インクルーシヴ・スポーツ学童」に継続的に参加することを通じて、友だちと触れあったり、スポーツをすることの楽しさを理解する。 ・ スポーツの楽しさを理解することを通じて、身体活動量が増加し、地方部の児童に見られがちな「座りがちな傾向」を改善できる。 ・ スポーツの楽しさを理解することで、スポーツ実施に継続性が見られるようになる。
保護者	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「競技が中心であり、参加のハードルが高い」といった、スポーツに対する偏ったイメージがあるため、「スポーツ楽しい」「ハードルが低い」といった認識に改める。 ・ 送迎・用具提供・学習支援のサポートがある。 ・ スポーツ活動が夜間になると宿題や学習時間に支障が出るため、その点に配慮がある。
指導者	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指導者の意識が勝利至上主義に偏りがちであるため、必ずしも勝負を前提にせず、楽しい・無理強いをしない、子供ファーストの柔軟な指導方法を身につける。

また、本事業を通じて得られた子供のスポーツ実施を促すポイントは以下の通り。

<ul style="list-style-type: none"> ・ 週1回の「スポーツ学童実施日」は必ずスポーツ活動に従事するので、子供たちの生活にスポーツが習慣化される。生涯、スポーツを楽しむきっかけになる。 ・ スポーツを食わず嫌いする子供たちに、強制ではなく、「スポーツは楽しい！」気分を味わわせることができる。 ・ 学校から「仲間といっしょ」に下校、という条件が、子供に「友だちといっしょに遊べる」という思いを引き起こさせ、「スポーツ（からだ遊び）したい！」という意欲を促す。 ・ 子供のスポーツ参加の増加により、もっとスポーツをしたい、という気持ちを促し、子供たちが他のスポーツ活動組織（スポーツ少年団など）に流れ込む可能性がある。
--

- 子供たちが自ら催したい（参加したい）と思うようなスポーツ交流会の実施。
- 子供のスポーツ現場にかかわる大人たちへ、スポーツ＝競技、スポーツは特別なもの、スポーツ嫌いは変えられない、など、スポーツに対する誤解、勘違いを払拭。「スポーツの本質」を再認識してもらおう。
- 家族で楽しめる「みんなのスポーツ」の実施。

6. 今後の事業展開予定

(1) 事業継続や横展開に向けたポイント、課題

事業の継続や横展開に向けたポイントや課題は以下の通り。今後も「インクルーシブ」な事業を展開する事、「地域人材の巻き込み」を図る事、「周辺環境の整備」に向けた取り組みを充実させていく。

【事業継続や横展開に向けたポイント、課題】

○幅広い層を対象にしたインクルーシブな事業展開

- ・ 本事業を楽しみにする不登校の子供が、学校に行けるようになり、最終的には毎日通えるようになった事例があった。(ポイント)
- ・ 障がいのある子供の保護者より「スポーツ少年団の入団を希望していたにもかかわらず、断られた。今回の事業は、だれでも受け入れてくれたので有難かった。将来のことを考えると、できるだけ健全な子供たちといっしょに過ごさせたい」という声があった。このニーズへの対応は引き続き意識したい。(ポイント)
- ・ 障がいのある子供を含めた「インクルーシブ」な活動であることを理解した協力者の確保が重要。ただし、障がいのある子供に対して、どこまでサポートをすべきなのかについての見極めは今後も要検討である。(課題)

○地域人材の巻き込み

- ・ サポーターや学習支援スタッフ等、地域の人材（シニアや地元の高校生）の巻き込みが重要だと感じた。ただし、彼らの対応の質・方針が異なることが原因となり、子供に戸惑いを与えることもあった。サポーターや学習支援スタッフの質を一定に保つようマニュアルの作成や講習会等を実施する。(課題)
- ・ 事業参加への意欲やリタイアの原因にもなることから、子供同士のいさかい・けんか等のケアが重要。(ポイント)

○スポーツ実施をサポートする環境づくり（送迎、補食の提供、学習の時間等）

- ・ バス送迎は必ずしも好評でない部分があった。歩く機会が少ない子供に保護者が徒歩を希望したり、乗り物酔いをしたりするので、バスは回避したいというのが理由だ。見守りをしつつ、徒歩で活動施設に向かう送迎パターンも今後検討する。(課題)
- ・ 補食の提供については多種類、適切なタイミング・分量で提供することをこころがけた。今後も継続する。(ポイント)
- ・ 学習の時間をどのタイミングで持つべきか、宿題後のスポーツ活動の方が充実感がある可能性もあり、今後検討する。

(2) 次年度以降の事業継続、横展開の計画

次年度以降についても本実証事業を得られた課題を整理したうえで、継続的に事業を展開していく予定である。また、近隣の総合型地域スポーツクラブなどの団体との交流も進める予定である。

【次年度以降の事業継続、横展開の計画】

○次年度事業について

- ・ 契約期間後も引き続き事業を継続する。
- ・ 継続はあくまでも自主財源での運営を目指すので、今事業とは異なり、可能な範囲での対応となる。
- ・ 今事業で大変有用であった地元の高校生やシニアの方々の協力を得つつ、できる限り今事業並みのプログラム展開を目指したい。
- ・ 同種プログラムを企画あるいは実践する他地域の総合型地域スポーツクラブとの連携等を通じて同種事業のノウハウの共有や協力イベントの開催を計画している。

○事業スキームや適切な費用負担の検討

- ・ 自主財源でカバーできる範囲は限定的であるため、必要に応じて受益者負担を求めつつ、持続可能な事業スキームの検討を行う。

(3) 今後の事業展開に向けて期待される sport in Life プロジェクトにおける取組

今後、「sport in Life プロジェクト」における取組として、以下の二点を検討いただくことを提案したい。

【今後の要望】

① 他の総合型地域スポーツクラブや近隣の諸団体との連携促進

- ・ スポーツ庁が主催となり、同種プログラムを企画あるいは実践している「総合型地域スポーツクラブ」と意見交換をする機会を設けていただけるとありがたい。特に、遠方の地域との意見交換は移動が必要となり難しいため、WEB での意見交換も検討可能ではないかと考えている。
- ・ 総合型地域スポーツクラブに限らず、近隣地域で連携が組める団体とのマッチングの場・意見交換の場を設けていただきたい。

② コロナ禍に対応したスポーツ学童の在り方の検討

- ・ 私たちの事業は単純なスポーツの機会の提供に加えて、送迎や補食の提供等もあるため、感染症対策の観点が多岐になると考えている。このような事業を展開する事業者に向け、コロナ禍における活動の在り方を議論する機会提供や「コロナ対策の事例を集めたガイドブック」作成も検討いただきたい。

7. 終わりに

「子供たちが、少なくとも週 1 回スポーツ活動をするのを習慣づけるにはどうしたらよいか…、それなら、学校帰りに直接スポーツ施設に行きスポーツ活動をすればいいのではないか」から始まった「インクルーシヴ・スポーツ学童」を、9月29日から1月26日までの間の毎週火曜日（原則として学校がおやすみの日はなし）15回開催した。

そもそも飛騨シューレは8年前から毎週木曜日「キッズテニス」活動を行っている。参加する子供たちは、今回と同じく、下校時から直接体育館へ向かい、おやつを食べ、宿題をして、テニスをして18時に保護者の迎えを待つ。

「インクルーシヴ・スポーツ学童」もこの方式でよかったが、いろいろ実験をしてみたかった。一つは、体育館までの「徒歩」を「専用バス」に、二つ目は、宿題の時間を「体育室」ではなく「学習室」で過ごさせたかった。そして、三つ目にしたかったのは、スタッフ（サポーター）の増員だった。運営スタッフ（サポーター）は、学習室2～3人（教員OB、シニアの方々）、体育室1～2人（地元高校生）がいられるようにし、スポーツ活動にも専門家に担ってもらうことで、スポーツする時間がより充実できるかどうか「試した」かった。また、家庭の事情で用具が買えないという声を聞いていたので、上靴だけ自前、あとは何もいらない、何もなくてもスポーツができる！という環境を実現したかった。

言い方を変えれば、それらが、つまり「送迎」「学習の時間」「見守り」「用具」「質の高いスポーツ指導」の有無が、「スポーツ実施を阻害する課題解決」ではないか、と考えたのだ。

並行して、大人への啓蒙啓発は不可欠と考えた。というのも、大人の言動こそが子供のスポーツ離れの原因なのではないかと常日頃思うからだ。そのため、子供の活動だけでなく、ペアレンティング（保護者教育）・ワークショップとグッドコーチング・ワークショップを行った。

実証実験効果については、上述によるが、今回の事業で我々が特に注視したのは「うまくいかなかった」課題である。以下に記す。

【うまくいかなかった課題の例】

- ・ 学校－保護者－主催者との連携…学校から直接施設へ、は便利ではあるが、学校と保護者と主催者との連携がうまくとれていないと子供の安全にかかわることがわかった。
- ・ バス利用の再考…バス酔いの子供は毎回体調を崩した。保護者からは「積極的に歩かせたいので徒歩がいい」という声がかかりあった。
- ・ 学習室での過ごし方の再考…宿題に要する時間の違いや年齢差の考慮をすべきだった。
- ・ おやつの種類と量と提供するタイミングの再考…年齢差や好き嫌い、体調の影響をどう解決するか。
- ・ スタッフの意識向上…インクルーシヴへの理解と、無理解により起こる「叱る」「注意」の区別を再考。

- ・ スポーツ指導者の資質向上…プロコーチと長年教員をしてきた指導者との違いが歴然とあった。前者は子供の人格尊重し目線を子供にとらえ、運営に協力的だったのに対し、後者は子供たちに命令口調や怒鳴ることが多く、「お客扱い」が当然のような態度が目立った。
- ・ 個性の強い子供や障がいのある子供に対するケア…マニュアルや勉強会の必要性を感じた。
- ・ 施設管理者の無理解による不安と不快…子供の安全安心が第一であるにもかかわらず、ズサンな対応が目立った。公共施設の指定管理を「個人」で請け負うの限界を感じた。
- ・ 行政とのかかわりの再考…行政は、首長や担当者が変われば事業がストップする恐れがある。事業継続の秘訣は行政に頼らず自前で運営する工夫だと思う。
- ・ 終了時間と保護者が子供を迎える場所の再考…駐車場の安全確保。
- ・ 子供同士のいさかいの対応…どこまで踏み込めばいいかという迷い。
- ・ 子供社会への理解…大人目線ではなく常に子供目線で見聞き考える重要性・必要性を感じた。

1月26日に今回の事業が終了した。が、引き続き、25人中16人の子供たちが毎週火曜日、学校の帰りに体育館に通ってきてくれている。「インクルーシヴ・スポーツ学童」は、学校でもない家庭でもない「子供の新しい居場所」になりつつある。ここは、子供たちにとって、のびのびと自由に、からだもココロも開放できるところ（スポーツの本質）であり、子供の自立自律によって成り立つコミュニティである。彼らを取り巻く大人たちは、それを見守り支える存在でありたい。

最後になりましたが、業務施行や書類作成に多大なご尽力をいただいたご担当者に心からお礼申し上げます。

